

俳人協会 新潟県支部報

No. 92

令和6年4月15日

令和6年度県支部総会記

上野 昭一

令和6年3月17日(日)午後1時より「万代市民会館」に於て、県支部総会と併催句会が開催された。今回、コロナ禍での障害はなくなったが、年頭初に発生した能登半島大震災は本県も予想外の災害を併発し、近年頻発する自然災害の怖さを痛感している、そんな中、本部より名取里美先生をお迎えして開催された。

総会は熊谷国男幹事長の司会の元、予め用意された日程表・議案書により進行された。井口光男氏の開会宣言、山口啓介支部長の実のある開会挨拶、そして、来賓の名取里美先生のご挨拶を頂きました。

会員への動向に就いて幹事長より報告された。特筆すべき



は会員減の多さが目立ち懸念される。この後議事に入った。

議長は恒例により山口支部長により議事は進行された。用意された議案は1号から4号まで、熊谷幹事長による明快、適切な提案説明があり慎重審議があつていずれも原案通りに可決された。

引き続き、第6回「支部俳句大賞」の選考経過の説明の後、賞の授与がなされて会議は閉会した。

併催句会は、いつもながらの美声の旗本春美氏・水野宗子氏により明るい雰囲気が進められ、名取里美先生のご選考ご講評のときは大いに盛り上がりを見せた。句会は慎重に得点集計があつて後、入賞者の表彰がなされ、執行部より7月の「花と緑俳句大会」の案内と協力量請等があり、無事閉会となった。

名取里美先生(特選三句)

手のひらで目覚めさせつつ雛飾る
下条 春秋

春の夢厨の母の振り向かず
小林 純子

振り返ることなく白鳥帰りけり
関口 道代

名取里美先生(佳作十二句)

病窓へ白き腹見せ燕の子
渡辺 徳治

うすらひの離るる軽さ寄る軽さ
寺尾亜真李

一列に無垢の瞳が来る深雪晴
下条 春秋

乾鮭の野武士に似たる面構
倉井 幸子

里山をまあるく包み雪解靄
上野 昭一

春風を後に飛ばしてオートバイ
番場勢津子

雲低く波煙して寒の入り
須賀 智子

風よりも速く火走る野焼かな
熊谷 国男

肩の雪揺すりて払ふ駅舎かな
本間 加津

天井をお通りらしき嫁が君
山本 武子

白鳥の声を見送る厨窓
小山 洋子

肩車せし児の髪に春の風
畠野 旬子

(高得点句)

手のひらで目覚めさせつつ雛飾る
下条 春秋

停泊の船に灯の入る雪催ひ
倉井 幸子

うすらひの離るる軽さ寄る軽さ
寺尾亜真李

猫の乳八つふくらみ日脚伸ばさ
平賀 寛子

越後には越後の空や榛の花
山口あつ子

泡ひとつ生み薄水の解けにけり
倉井 幸子

集落の結びの残りて春田打ち
番場勢津子

苗植えて時うごきだす千枚田
関口 道代

(合点成績)

1位 16点 下条 春秋

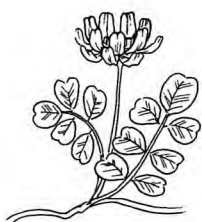
2位 14点 倉井 幸子

3位 12点 寺尾亜真李

4位 11点 山口あつ子

5位 10点 平賀 寛子

次点 9点 番場勢津子



第6回 支部大賞に村山靖子氏

準賞には羽賀晴子氏

県支部会員を対象とする第6回俳句大賞は応募句261句、87名で57%の参加でした（昨年は315句、105名で62%）。選考は16名の選考委員により、1次選・2次選が行われ、大賞・準賞それに佳作11句を決定し、3月17日の支部通常総会の席上で表彰式を行いました。

大賞

冬薔薇遂に独りとなる戸籍

村山 靖子

準賞

八月や墓標のやうな沖の雲

羽賀 晴子

佳作 (11句)

父の日の包み小ぶりで届きけり 高埜 健蔵
 フェリー行く秋の落日追ひ掛けて 小池 旦子
 夕顔や母を迎へに行く時刻 井口 光雄
 豆を炊く味噌屋の匂ひ初時雨 高柳 暁
 調律のピアノノ一音づつ初冬 古川よし秋
 太陽の子らとなりゆくしやぼん玉 渡辺 徳治
 日の匂ひ暮のほひや刈田晴 上野 昭一
 警報も爆音もなき星月夜 小出 利恵
 海中に父は居る筈虎落笛 小山 洋子
 大根引く巻機山よりの風を背に 土屋 瞳子
 ふたりをることのやすらぎ衣被 越野 蒼穹

(以上句稿番号順による)

【選考経過の概要】

選考は全投句261句を1次選として、選考委員16名により特選3句、入選20句を選句していただきました。その結果、特選と入選の合計点の上位(5点以上)の13句を大賞候補句(冒頭に掲載の大賞・準賞句と佳作11)としました。次に2次選として、1次選と同じ16名の選考委員により大賞候補句13句の中から、大賞1句、準賞1句を選んできました。その得点集計の結果、単純得点合計で得点2位に同点句が3句ありましたので、大賞候補句は2点、準賞候補は1点として再計した結果、13点句を大賞に7点句を準賞といたしました。3位は5点句でした。大賞の村山靖子氏は第2回俳句大賞に続く2回目の受賞です。

従来の合点賞については、「俳句大賞」という一句の出来栄えを評価する趣旨に適合していないということから今回から高得点賞に相当すること「佳作」として表彰することになりました。

役員体制について

支部長・山口啓介(野火)

副支部長・上野昭一(かまつか)

副支部長・井口光雄(春野)

顧問・森山暁湖(墨方家)

顧問・問・矢澤彦太郎(河)

参 与・川崎陽子(河)

参 与・山之内喜七(庭)

参 与・若井新一(香雨)

参 与・赤塚五行(朱鷺)

幹事長・熊谷國男(一葦)

△幹事▽

井澤秀峰(汀)

石黒正勝(無所属)

伊藤正一(鶴・初蝶)

越野蒼穹(銀化)

鈴木正芳(銀化)

土屋瞳子(野火)

寺尾亜真李(銀化)

戸田一子(野火)

篠本春美(野火)

平賀寛子(春耕・あきつ)

水野宗子(汀・かまつか)

八子栄子(青山)

山口あつ子(野火)

渡辺徳治(鷹)

△監事▽

倉井幸子(河)

本間加津(香雨)

△新潟県俳句大会委員会▽

委員長・矢澤彦太郎

委員・山口啓介・渡辺徳治・井口光雄・水野宗子・川崎陽子・平賀寛子・篠本春美・山口あつ子・寺尾亜真李・熊谷國男

△支部大賞選考委員会▽

委員長・山口啓介

委員・矢澤彦太郎・川崎陽子・森山暁湖・赤塚五行・井口光雄・井澤秀峰・石黒正勝・上野昭一・越野蒼穹・水野宗子・山之内喜七・山口あつ子・若井新一・渡辺徳治・熊谷國男

△支部報編集委員会▽

委員長・渡辺徳治

委員・篠本春美

事務局(兼務)

第13回新潟県

「花と緑」吟行記

番場勢津子

10月8日加茂市の加茂山公園で第13回新潟県「花と緑」吟行会が開催された。加茂山公園は、青海神社を中心とした里山で駅から近いこともあり年間を通して訪れる人が多い。

歴史ある神社の周りには数多くの見所があり、俳人にとって作句の素材が多く人気の高い場所である。第9回の吟行会（6月）も此処で行なわれた。赤い鳥居を潜り行くと神殿の急な石段が迫って見える。77段を上り切ると神殿が目の前に現れる。神池には、水車や噴水が動き亀の甲羅干しが見られるのだが今はどちらも休止中で亀は水底へ移動。水は濁っていたが大きな鯉が人気を集めていた。遊歩道を行くと児童公園、彫刻の森、雪椿園、リス園があり、大型スライダーを見つつ杉木立へと進む。老杉が多く、中でも

「千年杉」「翁杉」と呼ばれている御神木には圧倒される。野菊や赤のままを目にし、子等の声を聞きながら歩を進めると神社の前に着く。参加者は我が庭とばかりに初秋の吟行日和を楽しむことが出来た。

句会は公園入口にある公民館で午後2時より開始。投句は3句。互選5句とし内特選1句とした。山口支部長の挨拶の後、籙本春美幹事による披講。合評後に成績発表。支部長及び他の幹事より丁寧な講評がありその後表彰となった。最後に熊谷國男幹事長の閉会の挨拶と共に協力頂いた加茂野火会に感謝の言葉を頂き、盛会裡に終了した。

吟行会成績結果

- 一位 7点 内特選3点
水底を鯉の翳ゆく水の秋
寺尾亜真季（新潟）
- 二位 5点 内特選2点
鈴の緒を引けば秋韻にはかなり
山口 啓介（新潟）
- 三位 5点 内特選1点
良寛の草書の歌碑や初紅葉
酒井 道子（加茂）
- 四位 5点 神苑の石橋渡る水

- の秋 酒井 道子（加茂）
- 五位 4点 内特選2点
神池の椅子に先客秋の蠅
大橋 節子（加茂）

◇参加者の作品

- 五位迄の表彰者は除き申し込み順、原句のまま記載。
神域の樹々のさざめき秋の色
小林 風千（新潟）
- 一歩づつ階のぼる神の留守

- 佐藤 とよ（新潟）
宮前の売切れてゐる粟おこは
籙本 春美（新潟）
神池を水鏡とし秋海棠
村山 靖子（新潟）

- 池の端こんな所に曼珠沙華
菅家恵美子（加茂）
溝蕎麦や境内の井戸塞がれて
戸田 一子（加茂）
神苑の大樹の蔭に草の花
長谷川眞一郎（加茂）

- 躓ひて気付く齡や新松子
番場勢津子（加茂）
奉納し祈禱されたる今年米
番場ノリ子（加茂）
子等の声辺に響き大高し
渡辺 イツ（加茂）

- 朝露の乾きはじめる丸太椅子
渡辺セツ子（加茂）
スライダーもう一回と秋の声
笠原 徹（加茂）
木々の中我も根を張る初もみぢ
竹田 裕子（加茂）
坂踏めば赤のまんまは日矢の中
鷺尾 幸子（新潟）

- みのこづち少し屈んだだけに
平賀 寛子（長岡）
秋海棠水の暗きに華やげり
熊谷 國男（新潟）



不思議な出会い

川崎陽子

偶然と偶然が重なり、昭和五十六年一月に迷うことなく「河」に入会した。一つ目の偶然は、とあるスナックでの新潟への新支部発足のため来港していた「河」の幹部達との出会いである。『明日句会があるから出てみないか』との誘いにかつにも乗ってしまった。『一句でも良いから作って来い』との指令に生まれて初めて作ったのが、その夜降った初雪と飼ったばかりの子犬の句である。

目の中で初雪溶かす仔犬かな

陽子

この句を引っ提げて「句会」というものに参加した。当時の主宰角川照子氏、副主宰角川春樹氏も臨席されていたが、まさに怖いもの知らず。

二つ目の偶然は、この犬の句が当日の高点句となったことである。家に帰って夫に言った。『俳句ってすごく簡単だよ』と。とんでもない。それが俳句地獄の始まりである。

その約一年後、安了寺での観藤会での事。事もあろうに披講を仰せつかった。漢字は大の苦手。「木乃伊寺」が読めなくて、「きのいてら」と言い、皆の失笑を浴びた。そんな私が後に二十年間も俳人協会支部総会の併設句会の披講を担当するなんて当時は思ってもみなかったこと。

おかげで、私の俳句人生は作句と漢字との戦いの二重苦の日々が始まったのである。

「河」からは毎月本部から師が派遣され、親切丁寧な指導をしていた。当時は句会のおと、お酒が入りカラオケへと皆で足を運ぶのが恒例であり、その場での俳句談義が楽しく最も勉強になった。

そして新人会発足から四年後には「河」新潟支部へと昇格。今は亡き本宮哲郎氏を支部長に次いで矢沢彦太郎氏から私へとバトンタッチ、去年からは若い関矢紀静さんへと引き継がれ現在に至っている。

ひょんなことから始まった俳句人生だが、良き師、良き友に出会い、今ではこれらの不思議な出会いに感謝している。

気がつけば「河」入会してから四十三年が過ぎた。現在は次世代にどう引き継いでゆけば良いのかを真剣に考えている日々である、

俳句・初心の頃

わが身を燃え立たす

若井新一

父が胃癌で他界し、会社勤めの傍ら農業を始めたのは二八歳。将来も見越し、一生通してやれるものを探した。

近くの上村という床屋さんに「花守」に入会し、俳句の腕を磨くことを勧められた。「花守」の見本誌が届きすぐに応募を開始したのは、昭和五十四年の春だ。「花守」は志城柏(目崎徳衛)主宰先生は「風」の原始同人であり、西行の研究の第一人者。文学者、歴史学者で、昭和天皇へご進講をなされた方だ。「花守」は結社の質は高かったが会員が少なく、薄い雑誌なので、すぐに読み終えてしまい、物足りなさもあった。勉強の仕方が分からなかったので、先ず書店で飯田龍太の『俳句鑑賞読本』という本を購入した。寝る前の楽しみとして、(秋冬編)(春夏編)の二冊を読み耽る。この入門書から現代俳句とはどんなものか、概略を理解しようとした。龍太の句や文は清らかであり、コレステロールが少ないけれど、初心者が見て血や肉とするには、少々難しい箇所もあり、頭に入らない。

当時、小出の電報電話局に勤務しており、その近在には「狩」同人の、山之内喜七さんがおられた。現在は「庭」の主宰者である。山之内さんのご自宅にお邪魔したのは、昭和五十五年の秋。初対面にも拘わらず、丁寧に俳句のお話をしてくださった。今でもそのことは感謝している。全国誌の「狩」は鷹羽狩行先生の主宰の結社誌で、同人と会員を合わせ八百人程。先生の句に始まり会員の果てまで、明るい作風であり難渋さはない。ど素人でも、違和感なくやれると思ひ、見本誌を取り寄せて入会した。昭和五十六年のことである。爾来ずっと「花守」と「狩」の二刀流を続けたが、「花守」は平成十年にて、無念だが終刊した。

その後転機が訪れたのは、「角川俳句賞」への応募だ。俳句を開始して六年目のことで、「狩」同人木内彰志さんに「応募せよ」と勧められ、昭和六十一年に応募を開始した。爾来受賞迄は十二年要した。候補になっても隠す部分がないと、なかなか受賞には至らない。山本健吉は著書の中で「虚に居て実を行う唯一の俳人」と森澄雄を称える。『澄雄俳話百題』を読み「言わない大切さ」を存分に噛み締めたのは、不惑の頃だ。

旬会報

「庭」俳句会

令和5年12月19日

(通信句会)

嫁は皆姑となりて秋日和

林 美知子

振り返る人のゐなくて花八つ

羽賀 晴子

掃き寄せてごみの中より冬の

酒井 昭平

満開の十月桜十二月

山本 美代

肌を刺す風に乗り来る十二月

佐藤 昭子

しぐれ虹ひととき架かる大河

佐藤 健

かな

大島いと女

地蔵堂村役のする冬囲

大島 セツ

跡継の覗く旧家の冬紅葉

大島 詠志

楽隠居いまや死語なり冬囲

皆川 捷巳

手を借りて首筋に貼る懐炉か

本多 義堂

短日の風鐸にある陽のぬくみ

大玉 雅之

鍋つつく日の多くなる十二月

熱燭や師弟同じ国訛

増田 信雄

一茶庵先客五人落葉踏む

柴田 善子

着ぶくれて始発電車の客とな

深沢あずき

霜月や軒に薪積むログハウス

大塩 春治

変哲もなき雪山となる棚田

山之内喜七

(報・山之内喜七)

つばくろ句会 月例会

令和6年2月6日(火)

会場・燕市中央公民館

大寒や紙の刃に指うづき

関矢 敦

冬帽子編みたる人の手の温み

相場 祥子

風の道はみ出し走る虎落笛

金子加津久

老いの字が似合はぬ人よ寒椿

田中田鶴子

夕映えの河口の光り日脚伸ぶ

一才の双子の笑顔春が来る

立春の日差し細やか紙人形

田中田鶴子

喫茶店一枚ガラス春の雪
妹と旅の話や春立ちぬ
吉田千代美

電気水足りて感謝の二月かな
老二人締め雑炊食べ切れず
田中 初美

まんさくの花芽小さき登山道
大雪や買い出し妻の大袋
野島 正子

湯豆腐が一番好きと夫の膳
夕暮を待つて灯のつく雪の駅
杉山 安子

三寒を忘れて四温つづきをり
つくばひの一滴二滴春兆す
矢澤彦太郎

(報・矢澤彦太郎)

「風港」新潟句会

令和5年12月23日(土)

紙上句会

結局は赤を選びしシクラメン

星野ヒロ子

おでん屋に一人の刻や年迫る

佐藤 捷司

朴落葉踏み靴音の変はりけり

岩淵フジノ

牧之の句戸毎に灯す雁木かな

宮田 悦子

小春日和別れがたくて分かれ

道 佐藤三代子

しんしんと耳底の鳴るや星屑

吉澤 義章

焼芋のぬくき重さと帰宅せり

横森 宏子
狛犬も仁王も阿吽雪催
森山 暁湖

(報・森山暁湖)

「朱鷺」俳句会

令和5年12月23日

会場・佐和田公民館

十二月八日正義は疑はし

浜松 智弘

編み上げて退院を待つ毛糸帽

菊池 武美

「影の神」声を限りに虎落笛

長部 憲忠

眼科出て車を待てり時雨傘

金子よし子

磯舟の長き竿立つ小春風

浜田 萱草

煮凝や含めば母の味近し

絹沢 裕子

リハビリの皆勤賞を受く師走

松本 明子

通院は良き息抜きや小春風

井坂 儀一

命日や今はわたしが落葉掃く

若林 通子

着ぶくれの囲みほどけて販売

宮川伊都子

ぬひぐるみ抱へ師走の下船客

松本 正勝

虎落笛戦禍の子らの叫びかも

林 美知子

冬温し猫の散歩について行く

梅谷 妙子
カステラのざら目が薬風邪籠
井上 祥子

川音を添へて化粧の冬桜
坂下 浅一

最終便迎へる島の冬銀河
葛西ひろみ

赤い羽根募金係の赤ジャンパー
伊藤きよ子

老いて娘に言ふこと多し十二
月 宇治 一夫

呼び込みの声くぐりぬけ熊手
買ふ 横山 一美

おほかたを過ぎすお勝手花八
ツ手 奥田 京子

冷たしと母に言はれし我的手
よ 金子真有美

姉待てば鬼に金棒火吹竹
赤塚 五行

(報・赤塚五行)

雪起しスノーダンプに蠟を塗
る 大橋 節子

習得の机辺親しみ年迎ふ
神田 絹子

新潟野火会

(新年紙上句会)

雪積り積る棚田を眠らせて
小池 旦子

志ん生をききながら編む冬帽
子 小林 風干

手毬唄同じところをつまづけ
り 佐藤 とよ

雉鳩のロボット歩き春隣

土屋 瞳子

元日の灯明にまた余震くる

戸田 一子

クッキーと紅茶の午後や雪が降る

旗本 春美

イマジンの今こそ響け冬銀河

番場勢津子

注連飾掛け替へて部屋整ひぬ

番場ノリ子

葉牡丹にウイーン・フィルの余韻かな

村山 靖子

鐘楼の四隅に寒の屯せり

山口 啓介

変らぬもの変わりゆくもの初山河

渡辺 啓子

電柱の影の斜めや冬ぬくし

渡辺セツ子

枯れ尽くしたる明るさの雨の音

渡辺 長子

朝まだきうちに雪掻く通学路

阿達 秀昭

プレス機に油一差し鍛冶始

笠原 徹

旧友のまさに癖字の年賀状

菅家恵美子

冬帽子母より白髪多くなり

塩野 紀子

初春の茶笥に残るうすみどり

杉江 典子

特別になんにもしない小正月

渡辺 イツ

鴉等は山に帰らず冬夕焼

山口あつ子

(報・山口あつ子)

私の吟行地

魚野川周辺

秋山 保子

私の住む塩沢町中地区は、町に隣接した百五十戸ほどの集落です。遠方は高低を連ねた山々、眼前には村に添うように魚野川が横たわっております。川岸を歩いているだけで、四季折々変わってゆく自然の風景は良き吟行地の様です。川沿いにある春の桜並木の爛漫過ぎて葉桜に。川の流れるも穏やかにして滞りなく、草木の芽吹きも多種多様、下萌えから緑へ時には鮎釣りの人や網打ちの人に出会い、川魚の生息や魚籠の中を覗かせてもらおう。草や木が茂りを増すと野鳥や昆虫の動きも活発になり、突然の出現に散策の私は驚きと興味にたじたじ。夏から秋へそして冬へと叢がる芒の変化も見逃せない。青芒から枯尾花まで川岸には存在感のある植物です。秋はいろいろの実が敷の中や道端に落ちている。何の実か拾ってみるが持ち帰って食することは無い。

壮快の雪解川、時折白鷺の

群が川筋を飛んでいる姿は美しい。雲間より日ざし真直ぐ青芒

保子

私の「酒場放浪記」

伊野 智彦

この原稿依頼を受けて困ってしまつた。将来のものぐさからなのか、そんなに忙しくもないのに、「多忙」を理由として、作句のために吟行するようなことはほとんどない。せいぜい健康のため近所の線路沿いをウォーキングしたり、小魚を釣りに海に行ったりしたとき、句の原型が頭に浮かび、家に帰って句に仕立てたりする程度である。

ただ、なるべく句帳をポケットに携えるよう心掛けていた。こんな私でも歩くことにより脳が活性化するらしく、たまにポツと着想することがあるのだ。すぐ忘れるので、車に注意しつつ歩きながら殴り書きで記しておく。そして帰宅後にもっといい季語や表現がないかと見直す次第。

そうそう、酒場街は私にとって吟行地と言え言えなくもない。ただ、そこは結構授業料のかかる場所で、かつウォーキングなどで得ようとし

ている「健康」を損なうリスクも高い場所なのであるが…。

目刺食ひ滅私奉公昭和かな

智彦

山古志の里山

下條 春秋

長岡市山古志地域は、日本の原風景といえるほど美しい山あいの村々です。自然と人々が共栄する暮らしが育んで来た美しい景観、千年以上続く牛の角突きやさいの神行事又錦鯉発祥の地でもある。山あいの斜面に階段のように連なる棚田は、限られた山の斜面を開墾し先人が努力を重ね守られて来た。田植えが終わると錦鯉の稚魚が放され一年でもっとも美しい季節が始まる。豊かな自然や風物は句材の宝庫です。作句において自然が語り掛けてくるものをどれだけ発見し、客観写生を大事にしなから、これからも里山の自然や地域風土、文化、人々の営みを表現してゆきたい。

「継続は力なり」今後とも俳句活動を生きがいに精進してゆきたい。

谿かけて棚田一村風光る
春暁や棚田幾重に水の音
いっせいに蛸蚪に肢生え村動く

余花白し山ふところの牛相撲

春秋

造園の街「保内公園」

大橋 節子

私の住む三条市の保内公園は、県内有数の植木産地の地区を生かして整備された公園である。園内には緑の相談所・日本庭園・南国ムードの溢れる熱帯植物園・県内一のラダム噴水と言われ六回の変化する吹き上げ姿が見られる。そんな公園が私のウォーキングコースで吟行地である。イベントとしては植木祭りがある。植木の即売会として植木職人が庭造りや苗木の育て方など相談に応じる。

また春と秋にオーブンガーデンが行われる。保内地区の植木屋の庭を中心に廻るツアーであり、私も参加した事がある。本当によそ様の玄関先や裏庭など御自宅に接近して鑑賞させて頂くツアーである。どちらのお宅も見事なアートである。

そして公園の山頂見晴台からは越後平野の眺望も素晴らしい、四季を通じて緑の触れ合いを楽しむことができる。
草若葉植木屋の庭廻るツアー

節子

地の塩

織田亮太郎(銀化)

焚火して今日も時代に遅れけり
捨て場無き雪と行き場の無き人と
アルコール度数に裏返る淑気
探梅の黄泉路へ迷ふこともあり
日の匂ふ方へと回す白子干
派閥には属さぬつもり蛇出づる
地の塩を知りたる蟻の穴を出づ

春の風

小林風千(野火)

銀杏を莫座に広げて蛭野村
杉木立霧の奥にも霧こめて
電線の弛みさまま冬に入る
喜寿迎へ語る夢あり福寿草
黒板の文字そのままに師の賀状
遠火事のサイレン夜を揺さぶりて
猫の髭揺すりて過ぎる春の風

道草

増田よしを(貂)

たちろがぬことが青春雲の峰
紙魚の書の朱線にかの日蘇る
学童の疎開せし寺葛の花
道草の訳は秘密よ草じらみ
児に箸の持ち方正す文化の日
一握りほどの日溜り冬董
読み返す「昭和史発掘」隙間風

昭和時代

本宮 修(雪樺)

熱燗や昭和時代の鍛冶仲間
藍染めの藍の濃くなる雪催
鉄臭の肌を流して寒の月
暁の霜の中洲に千の鷺
うすらひの砂の泣き出す朝日かな
山沿ひの供花に合掌木の芽晴
下萌の夕日に戻る牛の群

私の近詠



『私の近詠』は原則として、
アイウエオ順に掲載。(編集部)

波高し

絹澤裕子(朱鷺)

車座は女ばかりや花万朶
うららかや百円店で三千元
草刈って道の長さを振り返る
三才児なんでも叩く蠅叩
長話し行ったり来たり赤とんぼ
波高し寒灯低し島暮し
揃はぬも七草らしき粥を食ふ

初日記

中野太浪(郭公)

慎みて地震記しけり初日記
母の日や征きて還らぬ子の遺影
夏座敷天地正大気の大書
佳きことを日記に灯火親しめり
秋深し母の地下足袋七文半
畑に未だ妻ゐる釣瓶落しかな
来年の今日を信じて賀状書く

野火

村山靖子(野火)

あをあをと五頭連峰や野焼の日
漣舟で火を点けまはる野焼かな
蘆焼の焰の歓喜拵げゆく
蘆焼の炎の向かう人の影
野火走り不意に野鼠走り出づ
燃えしぶるものを叩きて野焼かな
末黒野となりて天地ただ静か

君知るや

安原 葉(松の花(玉葉)
ホトギス・玉葉)

峰寺はまだまだ奥や冬木立
山寺や里よく見ゆる枯木立
山寺を埋めて一山霧の海
茶の花や王朝の世を偲ぶ橋
はや暮れてるし庭隅の枯芭蕉
雪国の雪の温さを君知るや
初電話兼ねてつぎつぎ地震見舞

事務局だより

幹事長 熊谷國男

◇3月17日(日)、令和6年度

の支部通常総会を開催し、議案すべてが可決承認され新年度の支部活動をスタートしました。なお、総会では、支部会員を増やす対策として現行の会員の資格要件となっている「俳人協会の会員であること」を俳句愛好者であれば誰でも加入できることに変更したらどうだろうか、という意見がありました。

◇まず、当面は7月15日(月、祝日)の「第34回花と緑新潟県俳句大会」に全力を傾注します。今年は、開催がこれまでより2週間ほど早くなりました。そのため投句締切日が5月15日(水)になるなど主要な作業の日程も早くなります。大会の開催案内を本支部報に同封します。支部会員の皆様の積極的なご参加を期待しています。

◇次に、新潟県吟行会を10月20日(日)に開催します。吟行地は新潟市歴史博物館と湊稲荷神社など下町界隈です。句会場は「北部総合コミュニ

ティセンター」です。信濃川の河口が広がり、歴史博物館の対岸は佐渡汽船です。湊稲荷神社の願懸高麗犬(狛犬)

は新潟市有形文化財第一号です。具体的な実施案内は9月の時点に配布します。

◇第7回支部俳句大賞については、9月中旬に投句の応募を開始し、応募締切を10月末日で計画しています。実施要領や投句葉書はその時点で会員の皆様にご案内します。

◇今秋10月に郵便料金の値上げが確定になっています。現行84円の郵便切手が110円になります。これは30%の値上げになります。郵便料金や資料の印刷(コピー)料金など事務的経費の節減に努めていきます。

◇支部会員の動向については、昨年度は死亡・退会により会員が18名減少しました。(死亡6名、退会12名)それぞれの氏名については総会の1号議案の令和5年度事業報告の「会員の状況」をご参照願います。

新入会員は次の2名です。

絹沢裕子(佐渡市) 朱鷺
小林風千(新潟市) 野火
今年度の退会(3月15日現在)
拍森 昌(加茂市) 青山
星美也子(魚沼市) 庭

◆訂正とお詫び

前号(第91号、2ページ)第33回「花と緑」新潟県俳句大会記の当日作品の成績の地元選者(特選)の上野昭一選。「黙禱の七十八□蟬時雨」の村山靖子作は「黙禱の七十八年蟬時雨」でした。深くお詫び申し上げます。訂正をさせていただきます。

◆お願い

支部報掲載の希望などありましたら、是非編集部ご連絡を頂くと有難いです。随時、原稿をお待ちしております。特に会員の『句集』についての紹介、鑑賞などありましたら歓迎です。ただ会報発行の時期が年二回の、4月と9月に予定されていますので、掲載時期は編集部にお任せください。会員の高齢化に伴い、支部会報の原稿依頼が困難になっていきます。会員の皆様方のご協力をお願いします。

(編集後記)

今年度は新年早々に能登半島地震が起り、県内でも最大震度六弱を記録して新潟市や長岡市、上越市などに大きな被害をもたらしました。新潟地震や中越地震、中越沖地震を思い起こした方も多かったことでしょう。

石川県では壊滅的な被害を受けた地域も多く、多くの避難所が開設されました。しかし避難所には行かず、近隣住民と共に農業用のビニールハウスで避難生活を送っている方々もおられました。また、県外を含め、多くの二次避難所が確保されましたが、地元を離れたくないと希望しない人も多かったと聞きます。先祖代々引き継いできた土地で住民同士が絆を深め、暮らしを守り、地域を守ってきたのです。災害時はこの絆が命を守り、復興に向けた大きな力になると言っても過言ではないと思います。一日でも早く穏やかな日常を取り戻せるよう願うばかりです。(旗本春美)

今回は「俳句」と「社交ダンス」の共通性を比較してみたい。「俳句」は、①定型②季語③距離④切れについて。「社交ダンス」(厳密にはボールルームダンス以下「ダンス」と略す)は、①足型②音楽③距離④溜めについて。の対比で共通点と違いを探してみたい。①は俳句の「定型」は「十七音」。社交ダンスの「足型」は「S&」の組み合わせ。②は俳句は季語。ダンスはタンゴ二拍子、ワルツ三拍子、スロー四拍子。③は俳句(二物仕立て)は季語に対し付かず離れず。ダンスも相手との適度な距離が必要だ。スタンダード(モダン)は、男女カップルのお互いのボディは紙一枚離れて踊るのが理想だ。ラテンも、男女は適度な距離を保って踊る。近づきすぎても離れすぎても良い踊りは出来ない。最後に、④は俳句は「切れ」が秀句の条件だ。ダンスも「溜め」がああ美しいムーブメントを生む。俳句は「切れ」が省略を生み余韻を残しポエジー(詩)を作り出す。「切れ」と言う武器を使って、いかに「広がりのあるポエジー」(詩)を詠むか。対してダンスは「溜め」という武器を使って、「スピード」「大きさ」「ムーブメント」をどう作るかだ。(渡辺徳治)